
こんなのもアリ！？

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなのもアリ！？

【Zコード】

Z2826G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

直人がクラスでいつも通りいるとそこにクラスメイトの女の子知世がやって来て何故かサインをしてくれと言つてきて。いきなりはじまるラブコメです。

第一章

「こんなのもアリ！？」

高松直人は今日十八歳になつた。とりあえず高校三年生で受験勉強で忙しい時だつた。だからこの日も受験のことばかり考えて自分のクラスで参考書を開いていた。

その彼のところにセーラー服の女の子がやつて來た。スカートは膝よりもかなり上で長い黒髪をツインテールにしている。胸はあまりないがスカートが短いせいかそれがやけに目立つ。そしてスタイルも全体は確かにいい感じであつた。

顔は童顔で目がはつきりとしている。唇は薄くにこにことした感じだ。顔はにこにことしていて顔は白く可愛らしい感じだ。この女の子の名前を暁知世といつ。

その彼女が彼の前にやつて來た。そうして彼に声をかけてきたのであつた。

「ねえ高松君」

「暁さん？」

「うん。ちょっと御願いがあるんだけれど」

そこにこにことした笑顔で彼に声をかけてきたのだった。

「ちょっと。いいかな」

「うん、いいよ」

参考書、それも志望大学の赤本に目を通しながら彼女の言葉に頷いた。

「別にね」

「書いて欲しいんだけれど」

「書けばいいの？」

「そうよ」

こう直人に答えてきた。

「書けばね」

「ふうん、書くだけでいいんだ」

「应えながら目は赤本だ。そこの傾向と対策を熱心に読んでいる。

「なんだ。」「最近の傾向はそんな感じで」

「それでね」

「うん」

「この紙なんだけれど」

「ああ、これね」

ちらりと見ただけで内容には全然お構いなしである。

「これにサインすればいいんだよね」

「うん。ここね」

その紙のあるポイントをここにしぶしぶ指差してきた。

「ここにね。サインしてね」

「わかったよ。鉛筆？」

「ボールペン」

知世は指摘してきた。

「それも黒ね」

「じゃあ」

この期に及んでもずっと赤本を読んでいる。関心はそこにはばかり
いつている。

「黒いボールペンで」

「ええ」

「書けばいいんだよね」

「名前。一文字も間違えたら嫌よ」

「名前なんて間違えないよ」

「今は答えるがやはりそれらの紙は一瞥だにしていなかつた。

「そんなの」

「じゃあ。書いてね」

「うん。高松直人つと」

実際にその名前を書いたのだった。

「これでいいかな」

「あとよかつたらね」

「まだ何かあるの？」

やはりここでも紙を一瞥だにしていなかったのだつた。

「今度は何かな」

「印鑑あるかしら」

「印鑑！？」

「そうよ、高松君の」

何故かここで声が笑っていた。

「印鑑。あるかしら」

「まああるけれど」

赤本を見ながらここで少し変に思つのだつた。

「それはね」

「あるのね」

「一応ね」

いつも答えはある。少し変に思つている」とは思つてゐるがそれで
も関心はずつと赤本に向けていた。赤本に向けている割合が九割五
分でその変に感じるのは後の五分だった。

「いるのよ

「何でなの？」

「朱肉はあるわよ

知世に問うと彼女はすぐに返してきた。

「こつちでね」

「朱肉つて？」

「それでいいわよね

「うん」

何が何なのかわからないまま答える直人だった。

「それでね」

「印鑑が必要なんだ」

「そうよ。印鑑がね」

「それじゃあね」

少し変に思いつつも印鑑を出した。まさか借金の保証人だとかそういうものとかはないと思っていた。高校生でそんな話はまず有り得ないからだ。

「これだけれど」

「はい、朱肉付けるわね」

「有り難う」

やはり赤本を見たまま答える直人だった。

「それじゃあね」

「それで押せばいいんだよね」

「そうよ」

知世の声はさつきより明るいものになっていた。彼女の顔は見てはいないが。

「はい、ここよ

「ここだね」

紙は碌に見ないままである。

「じゃあ。押すよ」

「はい、御願いね」

「よし、これでいいね」

「有り難う。これでいいわ」

知世の声はここでこれまで以上に明るくなった。

「これで晴れて私達はね」

「私達なんだ」

「そうよ、夫婦よ」

「ふうん」

この期に及んでも話はろくすっぽ聞いてはいない直人だった。

「夫婦なんだ」

「ねえ。あなた」

「あなた！？」

やつと知世の声がかなりおかしいことに気付いたのだった。
「後でこれ。お役所に持つて行つておくからね」

「お役所！？」

ここで遂に話自体もかなりおかしいことにも気付いた。

「お役所つて！？何で？」

「だから。私達結婚したのよ」

にこにことした声だった。

「これでね」

「ちょっと待つてよ」

流石に結婚と聞いては血相を変えた。その血相を変えた顔で知世

に顔を向けて問うた。

「何それ！？結婚つて！？」

「だから。今サインしたのはね」

「うん」

「婚姻届なのよ」

知世の顔はまるで天国にいるかのようになってしまった。そ

のにここにこした顔で直人に対してもううのであつた。その左手にはその婚姻届がある。何と直人のサインと印だけでなく知世のサインと印鑑もあるのだった。何時の間にか他の些細なことも全て書かれている。

「実はね」

「何の冗談！？」

とりあえずそれを「冗談」と「う」とと思つ直人だった。

「これって」

「幾ら何でも冗談で婚姻届は持つて来ないわよ」

「じゃあまさか」

「そうよ。本気よ」

「こう言う知世だった。

「実を言うとね。前から好きだったのよ」

「嘘・・・・・」

「婚姻届出して嘘なんて言う人もいないと思つけれど」

「それじゃあ。やつぱり」

「わかつた？ これで」

にここにことしているがその田は真剣な知世だった。

「ずっと言えなかつたけれどね。好きだったのよ」

「そうだったんだ・・・・・」

今はじめて知る衝撃の事実だった。直人にとっては。

「僕のことが」

「そうよ。私でいいかしら」

「いいかしらって」

「あつ、結婚はね」

ここにこで頬を赤らめさせる知世だった。

「今すぐでなくていいけれど。できたら」

「そこまで思つてるんだ」

「だから。それで」

にここにことした顔と笑つてはいるが真剣なままの田はそのままだ

がそこにもじもじとしたものも見せていた。直人の返事を待ちわびているのがわかる。

「私で。よかつたら」

「ううん、何て言うのかな」

直人もそんな知世を目の目にしてどう言つていいのか少しわからぬがそれでも言葉を苦労しながら出した。

「今。受験だけれど」

「ええ」

「確か暁さんと僕つて志望校一緒にだつたよね」

「わざとそうしたの」

こう答える知世だつた。

「苦労して。それで」

「だつたら。受験が終わつた時にね」

「その時?」

「そう、その時にね」

また言つ直人だつた。

「返事をしていいかな」

「その時なのね」

「一緒に合格しよう」

直人の次の言葉はこれであつた。

「一緒にね」

「わかつたわ。それじゃあその時なのね」

「僕も。大学合格するから」

「私もよ」

知世は少し意固地になつたような言葉になつていた。
「絶対に合格するから。その時によ」

「うん」

こう言い合つて約束するのだった。そうしてその一人の志望大学
の入学テストの合格発表において、まず飛び上がつたのは知世であ
つた。

「私、やつたわよ」

そのミニの制服で跳ね回りつつ直人に告げる。二人の周りでは合
格者の番号を見て悲喜こもじもであった。一人もまたその中にいる
のだった。

「合格。したわよ」

「おめでとう。まずは知世ちゃんだよね」

「うん。後は」

「僕か」

直人はここで顔をあげた。

「僕だけれど」

「直人君が受かつたらね」

「わかつてるよ」

こう知世に対して言葉を返した。

「それはね。一緒にだよね」

「ええ。あの紙、届けにね」

あの話に自然になるのだった。

「行きましょう、二人でね」

「そうだよね。一人でね」

「それでね。ずっと一緒に」

にここにことしているが切実な今の知世の言葉だった。

「それからね」

「わかつてゐるよ。実は僕も頑張つたんだ」

「それはわかつてゐつもりだけれど」

知世はここでその書いてもらつた時のことを思い出していた。直人は彼女の話をよそにずっと赤本とにらめっこをしていたのだから。

「それでも。やっぱり」

「不安なの?」

「ええ」

その切実さをさらに増して答えたのだった。

「不安じゃない?直人君は」

「実は僕もそうだけれど」

彼はここでは正直に答えた。

「それでも。受かつてゐよ」

「合格してゐるのね」

「絶対。合格してゐるから」

何とか自分の中にある不安を取り除きたいといつ気持ちもあった。だから言つた言葉である。

「だからね。安心して」

「そうよね。直人君凄く頑張つたからね」

「うん」

知世の励ましの言葉に頷く。

「だから。見てきて」

「僕が自分で見るんだね」

「こういふのは。自分で見るべきものよ」

こう彼に告げたのだった。

「だからね」

「そうだよね。僕が受けたんだしね」

「だったら。余計に」

そういうことだった。ここでは知世の言葉はしつかりとしたものだった。直人も彼女のそのしつかりとした言葉に頷いた。そうして今合格者の番号を書いたボードのところに向かった。そのうえで自分の番号を探すのだった。

探し終えてから踵を返して知世のところに戻った。戻つて来てみると知世はかなり心配そうだった。おどおどとして落ち着きがないようにさえ見えた。

「それで。どうだったの？」

「うん」

知世は直人の顔を見る。その顔は穏やかに微笑んでいた。

「それじゃあ今からね
「行くのね」

「約束だから」

これだけで充分だった。

「二人でね。行こうよ」

「ええ、わかったわ」

知世は今度は満面の笑みで彼の言葉に頷いたのだった。そうして二人腕を組み合ってそのまま役場に向かう。知世の思いも寄らぬ突拍子もない行動は最高の結末になつたのだった。

こんなのもアリ！？ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2826g/>

こんなのもアリ！？

2010年10月8日15時52分発行